医者も知らない平穏死

最期まで楽しむチャンスを家族が奪っている

「子供の手前、イヤイヤ抗がん剤治療に通っているんだ」と、ある末期がんの患者さんから打ち明けられたことがあります。

拙著「『平穏死』10の条件」を読んで在宅医療を依頼してきた近所の末期がんの患者さん宅を訪問すると、お子さんがすぐに出てきて、「ウチの親は、死の本を書くような医者に診てもらうほど、悪くありません！」と怒られたこともあります。

大切な親や家族との別れを想像したくない気持ちは理解できます。だけど、末期がんであれば、最期の時は刻一刻と近づいてきているのです。

でも、「緩和ケア」という言葉を口にすると怒りだす息子さん、「ホスピス」という名前を言っただけで許してくれない娘さんは少なくありません。

「私たちは、闘いたいのです。それなのに、どうして長尾先生は、緩和ケアなんてひどいことを言うんですか!?」

「抗がん剤＝生きる、闘う」「緩和ケア＝死ぬ、諦める」という思い込みがあるのでしょうか。家族って何？　子供って何？　なんだか切なくなります。

末期がんは、痛みが出る場合が多い。緩和ケアは、その痛みを和らげ、患者さんが旅立つ直前まで自分らしく「楽しむ」ための手段。決して、楽しむことを放棄するためのものではないのです。

健康な人にとっての1カ月は、あっという間に過ぎてしまうもの。しかし、末期がんの患者さんにとっては、その1カ月が、旅行できる、好きな物を食べられる、会いたい人に会える、自分の持ち物を整理できる、人生の最期の時間を楽しむチャンスかもしれないのです。子供や家族がそれを奪っていいのでしょうか？

（写真はイメージ）

連載㊼

〈長尾和宏〉長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に「『平穏死』10の条件」など。